

前橋地方裁判所御中

意見陳述書

平成18年5月12日
原告 佐藤晴



群馬県における八ッ場ダムについて意見を述べます。始めに主旨として、本件のダムは必要の無い物だと思えます。なぜならば、群馬県議会において水源かん養機能についての意見書を議決して以来、群馬県林業会議においても国をはじめとする関係機関あての提言をこれまでに二回行って来た。それに伴い林務部で水源かん養機能調査を行っている。その調査を紹介します。

森林には大雨時に河川に流れ出る水を少なくし、無降雨時に水を河川に流し続ける働きがあることは古くから知られていました。このことを森林の水源かん養機能といいます。しかし、水源かん養についての理論的説明は、まだ十分にできていません。

なお、一般的に森林内に降った雨の動きは次のようにいわれています。雨は直接地上に落下したり、樹木に保持され滴や木の幹を伝わり地表に達します。地表に達した水は土壌中に浸透します。土壌中に水の通路となる隙間が多いと、水はすぐ土壌にしみこみますが、隙間が少ないと、水たまりを作ったり、土壌の表面に流れて直接河川に流れ出します。土壌中に水がしみこむ時に働く隙間を粗孔隙といいます。さらに、土壌に浸透した水は、土壌中を徐々に下に移動し、河川に流れ出したり、地下水になります。

このことから土壌中の移動時間が長いほど、河川に流れ出る時間が遅れ、水を河川に流し続けることになります。水が土壌中をゆっくり移動する時に働く粗孔隙を貯水能といい、貯水能は粗孔隙のうちでも小さな隙間です。表層土壌

の粗孔隙が多く、貯水能の高い土壌が水源かん養機能の高い土壌といわれ、水源かん養機能は土壌中の粗孔隙の働きによります。

森林土壌には最表層に落葉、枯れ枝などの堆積した有機物の層があり、この層は地表を覆い土壌中に腐植を供給し、粗孔隙の多い土壌を作ります。そして、林内の下草は有機物層が直接雨滴の衝撃により破壊されたり表面の流れる水に流されることから保護しています。土砂崩れなどで表層の土壌が失われると、再び水源かん養機能の高い土壌になるには数百年かかります。その調査によりますと概ね土壌を大孔隙、粗大孔隙、粗孔隙、細孔隙と四つに分類した。なおこの分類の基は九州大学竹下教授が分類したものである。

(『林試だより 第15号』 群馬県林業試験場 昭和64年 1頁)

したがって、その調査結果によりますと、鑛川流域面積 26,226 町歩で 7280 万 t であり、神流川、碓氷、鳥川等々とし、本題の吾妻川にあっては面積 43,715 町歩であり、貯水能は 12,680 万 t となりそれに森林官事務所が管理を行う国有林野が六合村、草津、嬭恋、長野原町合わせて 36,437 町歩、その他の国有林が 246 町歩とあり 36,683 町歩となり県調査の係数をその面積にかけると 22,580 万 t となり、ダムの総貯水量 10,750 万 t の約倍の能力があり、まったく必要の無いダムであります。

然るに、被告人である県自らが一方では必要であると言い、他方では必要がないと言い出している次第です。

私共の血税を使うにあたり、ここに出廷されている官の皆様においては一考願いたい。しかし、人事の異動で林務部に移動すれば、そのときからダムは要らないと言い出すでしょう。終わりにあたり、林務部が現在進めている水源かん養保安林リフレッシュ事業の推進の方が私は望ましいことだと思えます。